

## インターバンクの声（2015年4月20日）

月初に発表された雇用統計までもが弱い結果になってしまった最近の米経済指標だが、その後も消費や住宅関連を中心に弱い米経済の状況を示す指標発表が続いてしまっている。先週末も4月のミシガン大学消費者信頼感指数こそ若干市場予想を上回ったが、3月の消費者物価指数も上振れすることはなく、広がっている米連邦準備制度理事会（FRB）の利上げ時期の後ずれ観測が薄まることはないと思われた。ところが、相場が厄介なのは、こうした指標結果に対し、時として足許での反応と中期的な相場観が全く同じになるとは限らないことだ。週中からドルの軟化を見越してドルを売り持ちにして来た投資家の一部は、ドル/円であれば117円方向、ユーロ/ドルであれば1.09ドル台方向へさらにドル売りを進めるべきか、金曜日にも消費者物価指数の結果が一つの大事な判断材料だった。ここで、一部の投資家は、消費者物価の前月比での上昇、しかも2ヵ月連続のプラスとなったことがFRBの年内利上げ開始の可能性が残ったと判断したのだ。この結果では、利上げが年内は無理と判断した投資家にとっても、大きな利食いを中心とした買い戻しが入って来たとあっては、不本意ながらドルを買い戻さざる得ないのだ。しかも金曜日とあっては、不安を抱えたまま週末を送りたくないと言った心理も働いてしまう。ドル/円もユーロ/ドルも纏まったドルの買い戻しが終わった後は、概ね元の水準近くまで戻ってしまったが、これも良くあることだ。先週半ば辺りからのドル売りバイアスはまだ続いているようだが、金曜日の指標への反応のように簡単には行かないのが相場の常だ。

---

提供：SBI リクイディティ・マーケット株式会社

お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複製もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。

本レポートに表示されている事項は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。